

593

特277-796



特277

796

公社編

國民講座

軍

部

を

十錢

裸にする

東京市神田區小比呂二丁目一
電話 四七二二
發行所 高坂久喜
印刷所 同人
日刊 (毎月一回一日發行)

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



國民社編

軍部を裸にする

發行所 東京 國民社

76W10735



序

今回は「軍部を裸にする」事にした。裸になると云ふ言葉は國民講座に何となく似つかぬやうな氣がするが、昨今國民の眼は軍部の一舉手一投足に吸ひつけられて了つたかの觀がある。

此の時此の際、軍部を奪る裸にして其の正體を國民の前にさらけ出させたがよい。眞裸にして新興軍部の全貌を覗かすがよい。軍部を國民の疑惑と臆測から解放する事は正に急務中の急務である、宜しく以て軍部を裸にすべしとなして斯んな卑俗の名題を選んだわけである。

然し裸にしようとして却つて衣帯を纏はせはしなかつたかを恐れるが、着せたり脱がせたりしてゐるうちに臆ながらも軍部といふものゝ大體を窺ひ得ば本講座の目的は達する。吾等は茲に軍部の純乎たる興國精神に多大の敬意と共鳴を捧げると共に軍部の動くは所謂一に且絶対に建軍の本義に則るべき事を祈求して止まないものである。

編者識

目次

一、	妖怪の横行……………	二
二、	軍部とは一體何か……………	五
三、	軍閥華かなりし頃……………	九
四、	山縣は陸軍組織の祖、宇垣は陸軍改編の祖……………	一四
五、	舊軍閥軍部から新興軍部への過渡時代……………	一七
六、	反宇垣熱と新興勢力の擡頭……………	二一
七、	統帥權干犯問題とは何か……………	二六
八、	統帥權干犯問題は陸海軍將校を刺戟……………	二八
九、	清軍運動の擡頭……………	三〇
十、	遂に荒木時代……………	三四
十一、	舊軍部と新興軍部とは何處が違ふか……………	三六
十二、	新興軍部は何を考へて居るか……………	四〇
十三、	滿洲事變をきっかけに軍部は立ち上る……………	四三
十四、	新興軍部の陣營……………	四六
十五、	一五事件と軍部……………	四九
十六、	軍を統制しつつ、押進む軍部……………	五三
十七、	滿洲國を握つたまま、押進む軍部……………	五三
十八、	政局をリードしつつ、押進む軍部……………	五三
十九、	實行を強調しつつ、押進む軍部……………	五八

立言

- 一、國民講座は國家的重要問題其他一般國民の教養上必須なる事項を叙述解説するを以て目的とす
- 二、國民講座は思想統制の常置機關を以て任ず
- 三、國民講座は國家的觀點に立ち偏せず黨せず眞摯嚴正に題材を叙述解説するを以て要旨とす

軍部を裸にする

一、妖怪の横行

妖怪
ばけもの

「日本には、今や、偉大なる一つの妖怪が横行して居る。その名は、軍部だ。」とは、有名な軍事通某氏が、或雑誌に寄せた文章の冒頭の一節であります。勿論、某氏は、軍部の深い理解者であり、全的に軍部を支持して居る事は、其の文章を一讀しても了解出来る事であり、ありますから妖怪と云ふのは、單なる修辭上の誇稱にすぎませぬが、それにしても現在の軍部を指して、妖怪と稱するは當らないと思はれます。

悒鬱
て心がふさがり
はれぬこと

何となれば、政治、外交、經濟、軍事、思想等いづれの方面も行詰つて、國民をして悒鬱ならしめた國家の前途に、滿洲事變以來一縷の光明と、一脈の希望を齎したものは、實にこの軍部であるからです。

併し、軍部の、各方面へ働きかける日本再建運動が、餘りに強硬である事が、軍部はフアツシヨだ、軍部は獨裁を目論で居る、軍部は議會を認めない、軍部は國家社會主義だ、

流言蜚語
根も葉もない
云ひふらし

震憾
うちふるはす

ヘゲモニー
覇權

軍部は反資本主義だ、と譯もなく呼ばれ流言蜚語の原因となつて、國民の疑惑を濃厚ならしめた事は事實です。殊に、五・一五事件に於ける軍人の暴力行使に刺戟されて、軍部と云ふ言葉や文字が、一味の妖氣を漂はせ、一種の無氣味さを感じさせる事も事實です。五・一五事件は、國民を震憾させましたが、同時に、軍部にとつても意外な出来事なのでした。その爲めに、事件直後、軍部は、軍の統制問題に専念しました。そして、それが完全に行はれて、七年五月二十日、陸軍參謀長會議に於いて、荒木陸相の「皇軍の動くは、一に且つ、絶對に、大命に基き、皇軍全體として動くべきもので、私兵の如く、部分的に、特に、横斷的に結成して、勝手に動くが如きは、斷じて許さるべきものではない。」と云つた有名な宣言を、完全に裏書きした現在に於ては、一脈の妖氣、一種の無氣味を、國民は感するのであります。

とまれ、内閣の一擧手、政黨の一投足が、廣汎な範圍に亘つて、その意見を徴せずには行はれ得ない程のヘゲモニーを、この非常時に、又非常時なるが故に握つて居る軍部とは一體何でせう。

一、軍部とは一體何か

軍部と云ふ言葉は、陸軍全體を指すのでもなければ、海軍全體を指すのでもありません。勿論、皇軍全體を指す言葉でもないであります。

「軍人の中の、極めて少数ではあるが、政治的方面に接觸する一部を云ふのである。」と云つた人があります。

「軍人、ことに將校團が、政治、經濟等の軍隊外部の諸勢力に對應接觸する時に現はれる概念である、故に、軍部と稱し、又、稱せられる時は、それに屬する將校達は、已に純粹の軍人としてではなく、接觸する外部勢力を、半ば反映する事になる。」と云つた人もあります。

要するに、陸海軍省、參謀本部、軍令部其他の中央機關を構成する軍人の一團を指してゐる事は間違ひありません。

そして、政治、經濟其他の外部諸勢力に、或る關心を持つ將校團をも、漠然と、今は、含んで居る様であります。

ですから、軍部は明治の昔から存在して居る譯で、事新しく詮議立てする必要もない事なのですが、注意すべきは、我々が軍部と云ふのは、滿洲事變直前に、荒木陸相を中心として新興勢力によつて構成された軍部を指すのであります。

諷
あてこする

この新興軍部と、それ以前の軍部とは、質的に非常の差異があります。思ふに、妖怪と云ふ名は、この、以前の軍部にこそ最もふさはしい名ではなかつたでせうか。

第二次西園寺内閣は、陸軍軍部の二ヶ師團増設の要求で倒れました。

清浦伯は組閣の大命を拜受しながら、海軍軍部に海軍擴張の豫約を求められて流産しました。

これ等は、ほんの一例に過ぎません。國民の總意、世界の趨勢を顧みぬと云ふ非難を受け、日本の軍部はエヂプトのスフィンクスの如く、通りすがりの歴代の内閣に向つて、謎をかける。其の謎を解き得る内閣は存在するが、謎を解き得ぬ内閣は潰れる。」とまで諷されたのは、この舊軍部です。

しかるに、新軍部は、前述の如く一脈の妖氣を漂はせながらも、國民の信頼を受けて國家の前途に光明あらしめ、政治に、外交に政府の中樞神經となつて、邦家の方針に誤なからしめて居るのです。

この差異は、一つには非常時なるが故にでもあります。その構成分子が質的に一新したからであります。

因由
原因

薩 長
薩摩 長門
疎斥
うとんじしり
ぞける
閥族政治
門閥が相寄つて要職を占め政治を行ふこと
元帥山縣
山縣有朋

では、何に因由して、如何なる経路を経てどう一新したでせうか。先づ少くとも大正年代に遡つて、軍閥華かなりし時代を一瞥する必要があります。

三、軍閥華かなりし頃

薩の海軍、長の陸軍と云ふ言葉が、宿命的な迫力を以て、國民や、下級將校の腦裡にこびりついた時代がありました。

明治から大正にかけての長い間です。

これ等「軍閥は交互に政權を授けしつゝ、政黨を政治圏外に疎斥して、閥族政治を作り勢威のあらん限りを張つて、」居た時代なのです。

長閥の巨頭、元帥山縣は、我國陸軍建設の祖であると同時に、維新の元勳でもあつた關係から、その勢力は、單に陸軍部内に止まらず、政局に對しても多大な壓力を持つて居ました。

従つて、彼、及び彼の後繼者が、其の軍閥を擁して居る間、所謂軍部は、その系統に屬する人々を以て組織され、閥族の權力を背景に、朋黨の勢威を振りかざして、スフィンク

スの如く、通りかゝる歴代の内閣に對して致命的な謎を投げかけると共に、陸軍部内に極端な専横を行つたものでした。

例へば、日露戦争當時、大將十四名中、薩長出身者十名に及び、軍司令官をこの閥族の人々が獨占して、戦勝の榮譽を、薩長閥自らが擔ふのでした。

又、シベリア出兵の決定と共に、出征師團の師團長柴大將が、長閥でなかつた許りに、突如更迭されて、大井大將がこれに代りました。

又、尼港事件に、サガレン出兵旅團長が、出發直前、長閥津野少將と變更され、士卒は見知らぬ旅團長に率ゐられて出征しました。

又、田中大將の陸相後任として、部内の意嚮は、福田大將の就任を當然として居たにもかゝわらず、長閥巨頭の後繼者なるが故に、山梨大將を推してしまひました。

この様に、閥族軍部は、權力を擁護し、榮譽を獨占せんがために、極端な専横を行つたものでした。

ところで、閥族と云ひ、軍閥と云つた所で日本人は日本人です。

幸にも熱烈な愛國主義者であり、國家主義者であり、皇室中心主義者であつたのです。それが、一層にも、忠勇無比な、下級將校や、兵卒の支持を得て、日本の國威を海外に

宣揚する事が出来たのでした。

たゞ、彼等軍閥の人々は、視野が餘りに狭く、思想が甚だ偏して居り、世局の變移に順應する事を知らず、そして、名譽慾と權力熱が甚かつた爲めに、一般國民の指彈を受け、たのみならず、下級の將校間に、ひそかながらも、非議し、非難し、批判する聲が擴がりはじめたのでした。

實際、閥族軍部は、國軍の首脳部として、舊式な指導精神を以て部下に接し、社會を見るなど云ふ風な馬車馬式の教育と訓練とを以て部下に對して居たのでした。

一方、國軍の中堅をなす下級將校は、上司の命を重じ、出づれば忠勇義烈の精神を發揮せん事を念ひ、入つては攻城野戰の研究に致々として没頭して居たのですが、流石に、長閥軍部の横暴に對する不満の氣は、鬱然として起り、遂には、陸軍を閥族の手より自由ならしめよ、人材登庸の途を開け、人事の公正を期すべし、以て、軍の再建を企圖せざるべからずと云ふ主張が、私かながらも叫ばれる様になつたのです。

今日、陸軍の中堅を形成する十六期の人々當時大尉級の

永田 鐵山
岡村 寧次

指 彈
つまはぢき

小畑 敏四郎
東條 英機
磯谷 廉介

等、現在の少將級の連中によつて創められた所謂清軍運動も、さうした空氣の一つの現れです。

又、大正九年當時、參謀本部に在つた大尉級の人々

鈴木 貞一
松井 太久郎
安田 鐵之助
牟田口 康也
本多 政材

等、現在の中佐級の人々によつて起された讀書會も、こつした空氣の一つの現れでした。

これ等は、閥族軍部の壓力の下にあつて、勿論、表面化の出来る筈もなく、全體的な大きな力となる事の出来る譯でもありませんが、當時の少壯將校にとつて如何に痛切に、閥族打倒、人事公正、建軍の本旨に基く陸軍の再建と云ふ様な事が、關心事となつて來たか

と云ふ事の一例であります。

四、山縣は陸軍組織の祖 宇垣は陸軍改編の祖

かくの如く、閥族の勢威なほ衰へず、軍部權を廻つて比周これ事とし、只だ、少壯將校の間に、軍閥打倒すべし、人事公正を期すべし、以て、建軍の本旨に基いて、軍を建直さざるべからず、以て、邦家百年の大計を樹立せざるべからずと云ふ信念が、漸く深くなりつゝある時に當つて、世局は、世界大戰終了を一期として、大變化を將來しつゝあつたのであります。

即ち、大戰後、世界平和と、國民負擔額輕減との二大要望に基つき、國際協調、軍備縮少が、世界各國の重要な問題となり來つたのであります。

東亞の特殊な情勢下にある我國も亦、其の影響を受けたのであります。議會は、各政黨一致の、陸軍軍備縮少決議案を軍部に突きつけ、四千萬圓天引きを強要したのでした。

そして、大正十一年の、山梨整理案が實行されたのでした。

比周
と親しみ合ふこ

所が、翌十二年は例の關東地方大震災であります。

財政いよ／＼窮乏を告げ、輿論は再び陸軍の整理を要求したのでした。

そして、大正十四年の宇垣整理案が、實行されたのであります。

抑々我が陸軍は、維新以來、國家のあらゆる文明的施設の中で、常に其の尖端に立つて進歩を計り改善を加へ來つたもので、萬般に亘つて一の不用が有る筈のものではありません。

従つて、國土を防衛し、國民の生存利福を保障し、帝國傳統の國是を貫徹する爲めには軍備縮少は絶対に不可能であるのです。

しかし、軍自身の傳統的精神に基いて

ロシア帝國の滅亡

ロシア陸軍の瓦解

世界大戦間に於ける、各國軍の劃期的發達

大戰後、世界に於ける平和的風潮

大戰後、世界に於ける各國の疲弊

等を考慮して、當然、國防計畫の建直しと、國軍の整理改造を必要としたのです。

ですから、十一年の山梨案にしろ、十四年の宇垣案にしろ、多少の節約を行ひながら、節約費以上の、又は同額の新設改造費を要求したのであります。

日露戦争の初期は十三ヶ師團しかなかったのですが、戦後、十九ヶ師團に擴張され、其の後、平時二十五ヶ師團整備の計畫を立て、大正十年には、二十一ヶ師團、二十九萬の兵力を有して居たのです。

十一年の山梨案は、輿論に反して師團數の減少を行はず、各兵種の中隊數を減じて、二千二百の將校を含む六萬二千五百人の兵と一萬三千四百頭の馬を整理し、經費二千四百六十二萬圓を節約したのですが、新に、機關銃、重砲、無線電信器材等新裝備の充實を計りました。

又、十四年の宇垣案では、輿論に従つて、斷然、四ヶ師團を廢して、經費二千六十萬圓を節約し、新に、航空隊の増設、戰車隊、高射砲隊、軍事科學研究所等の新設、輕機關銃、火砲射撃材料等の整備、改良等を行つたのでした。

前者は、軍事上より見ても、頗る不合理な整理であつたのですが、後者は著しく帝國陸軍の陣容を新にして、山縣は、陸軍組織の祖、宇垣は、陸軍改編の祖と稱せられ、殊に何人もなし得なかつた四ヶ師團の減少を斷行した宇垣の勇氣は、即ち軍人政治家として認

識される原因となつたのであります。

然し、一方、部内に反宇垣熱が次第に高まりました。

宇垣は自分の政治的野心の爲めに、政黨政治家と妥協して、軍の使命を没却するまでの軍縮を行つた。軍政改革の美名の下に師團を縮少し、國防の欠陥を承知の上で、豫算緊縮に應じたと云ふのです。

そして、政黨と妥協して、陸軍の大受難時代を將來したと云ふのでした。

宇垣にしる、山梨にしる、國防の本義を殺却してまでもと思つてした事ではありますまい。

『全世界の有機的結合は、年に月に増進しつゝあつて、現に一國家は、それ自體のみでは生存出来ない。世界列國に伍してこそ、存在を續け得らるゝのである。共同社會に於ては獨り自國の利害と必要とを考慮するのみならず、一般諸國の安定に寄與し、眞の平和の爲に貢獻せねばならぬ。世界を擧げて、國際協調に熱狂しつゝある現在、一國の財政的安定をも顧みない軍備は、徒らに、總ての國家の生存を脅し、世界の公論を敵とする事になる。この場合、不合理な軍備の増進は、客觀的には國家の向上とはならない。むしろ、出来る丈、縮少して、さらでに困難を極めて居る財政を救ひ、その餘剩財源を負擔軽減に充當

して。最も肝要なる國力の涵養を期すべきである。』と云ふ輿論と、『軍人にとつて戦争は最高の道徳である。さればこそ、最大の犠牲を捧げて、戦争の準備、即ち軍務に日も維れ足らず、努力精勵し得るのである。

故に、軍備擴張こそ軍人の本務であつて、國家の資源は、軍備本位に按配せらるゝもの。政略は國防計畫を基本として動くべきだと信ずる。』と云ふ軍人的な精神の間立つて、彼宇垣は幾何か苦慮した結果、輿論に對しては四ヶ師團減少、軍に對しては軍の改編と云ふ政治的手腕を振つたのでせう。

その結果、財政的寄與は甚だ微温的なものでしたが、軍人政治家としての手腕を認められ、陸軍改編の祖と稱せられました。同時に前述の様な非難を蒙つたのでした。

當時にあつて、職業的な意識や、感情的な立場からではなしに、國策そのものを検討し再認識して、邦家百年の大計を樹立せんが爲めに、滿洲問題に非常な關心を持ち、その根本的解決を研究する一團が、昭和二年研究会と云ふ會合を持ちました。

検討 しらべる

根本博

鈴木貞一

坂西一朗

士橋勇逸

と云つた連中で、嘗て、讀書會を組織した參謀本部の少壯將校の人々です。

會合は、昭和五年まで續きました。

軍閥打破、人事公正と云ふ在來の主張と共に前述の滿洲問題の根本的解決がその中心主張であつたらしいのです。

そして、その滿洲問題の根本的解決と云ふ點から、宇垣の整理案を非常に心外としたのでした。

五、舊軍閥軍部から 新興軍部への過渡期時代

さて、一方、長閥の消長に關しては、第三次巨頭、田中義一の急逝と共に、流石の長閥にも、凋落の秋がやつて來たのでした。

後繼者山梨半造、其の器に非ずして、己倒の頹勢を挽回するに由ない始末です。

そして、今や、軍部に勢威を張る者は、宇垣陸相であり、この氣息奄々たる長閥を、一刷毛に抹殺し去つた人も亦、長閥の寵兒と目された彼宇垣一成其人なのでした。

凋落
と
類勢
勢のおとろへ
ること
輓回
とりもどす
抹殺
ぬりけす
寵兒
特に愛する子
お氣に入りの人

巨斧 大きな斧

「長州人に非ずんば軍人に非ず」とまで勢威を張つた長閥に對して、人事の巨斧を振つた事は、我國陸軍史上特筆すべき功績とも云ふべきでせうか。

併し、茲に、宇垣陸相の達識もさる事ながら、特に注意すべきは、陸軍全體に、閥族打倒の空氣が充滿し、權力關係を中心とした軍閥の存在を許さない空氣が、陸軍全體に横溢し來つた爲であるとも云はれませう。

恰度、ナポレオンが、葬られ去つたのは、一ウキリントン有つたが爲ではない。十九世紀が、ナポレオンを必要としなかつたからだと云つたあのユーゴーの筆鋒をかりて云へば上は將軍から、下一兵卒に至るまで、別して、軍の中堅少壯將校の自覺覺醒が、最早、長閥の跋扈跳梁を許さなかつたからであると申しませうか。

で、清軍運動以來、讀書會、研究會等の主張が一部貫徹した事であり、同時に、中堅少壯將校の希望の一端が、實現した譯ではありますが、しかし、事態は決して彼等の満足に價するものではありませんでした。

即ち、閥族は打倒し得ましたが、人事の公正が未だに期し難い情勢であつたのです。

人事が、宇垣陸相によつて、相當の無理がなされてゐると云ふ事でありませう。

田中内閣時代、「當時は未だ、自己の信念を固く持して、上に對して強い意見を吐いた

跋扈跳梁 はびこる

り、忠告的態度を取つたりすると、直ぐに、にらまれて、煙たがられて、遠ざけられてしまつた」のです。

そして、長閥が倒れてもなほ「郷土閥、個人閥によつて、人事が支配せられて居た」のでした。

現在の軍部首脳を構成して居る諸將、分けて、荒木、真崎、秦と云ふ様な人達も、強硬派であつたために、少壯中堅將校の輿望を負ふて居ながらも、田中内閣以來、常に上司から、白眼視されたものでした。

荒木は、參謀本部から熊本師團に、真崎は士官學校長から弘前師團に、秦は滿洲から歸ると直に金澤師團司令部付にと云ふ風に、この派の人は、中央から遠ざけられ、邊土に左遷させられたものでした。

少壯中堅の將校達が、舊に倍して、人事の公正を叫ぶ様になつたのも無理からぬ事でありませう。

たゞ、注意すべきは、こゝに個人閥と云ひ、郷土閥と云つた所で、かの長閥に代る程の勢力もなければ、結束もなかつた事です。

一人の権力者を取巻く一群、立場とか、考へ方とかを中心とする一郡に過ぎない事です

邊土
片田舎

過渡期相
もの、移り行く時代の有様

澎湃
水のみなざる

そして、その群を作り、中心を支持する範圍が、個人的な關係範圍であつたり、郷土的な關係範圍であつたりした事が、一般の誤解を招來し、中心人物宇垣陸相が、餘りに政治家的な手腕を弄した爲に、人事に就いての非難を受ける様になつたのであります。

それにしても、現在の軍部首脳が、軍の全面的な希望によつて、その地位について居るのは、非常に相違したものに違ひありません。

切言すれば、舊軍閥軍部から、現新興軍部への過渡期相として、その新舊兩面を持した宇垣の一群が、暫くの間、活躍して居たのであります。

六、反宇垣熱と新興勢力の擡頭

内、閥族の勢威地を拂つたとは云ふものゝ、宇垣陸相の人事、なほ公正を欠き、外、滔々たる和平の風潮に乗じて、軍備の緊縮を求むる聲、國內に澎湃として興る時代がやつて來ました。

一方、少壯將校を中心とする我が陸軍の中堅は、滿洲事變の徹底解決を策して、清軍の必要、軍備の充實を切實に望んで止まなかつたのであります。が、輿論は、遂に三度、軍

縮案を提げて、軍部に迫つたのであります。そこで、それを解決すべく、宇垣陸相の主唱する軍制調査會が、設けられたのであります。

昭和四年七月、濱口内閣が成立するや、政府は十大政綱なるものを發表しました。

其の中で、國際的に軍備縮少の促進を提唱し、且つ、中央、地方の財政に對し、一大整理、一大緊縮を斷行すべく、陸海軍の經費に關しても、國事に支障を來さざる範圍に於て大々的整理節約の途を講ずる所があるであらうと、堂々と聲明したのであります。

一方、宇垣陸相は、濱口首相に對して、相當軍備の整理縮少を斷行する意味を答へたと傳へられました。

間もなく、陸軍省内に、軍制調査會が設置せられ、本省や、參謀本部や、教育總監部やから、俊敏なる幹部が、夫れ夫れ委員に任命されました。

その開會に際して、陸相が訓示した陸軍の根本的整理方針の要旨は「國軍將來の爲、最善の方策を立案し、國防の基礎を一層安固ならしむるを主眼とし、殊に帝國現下の思想産業財政等を考慮して、國軍の制度施設に、根本的改善整理の方策を研究し、審議する」と云ふのでした。

更に、その具體的要項によると、

一、國軍の技術的充實

一、國防の本義たる、國民心身の健全と、産業の伸展助成

一、極端なる割一主義の緩和

一、軍施設の經濟化、能率化

と云ふ様な、軍制改革の主義方針として、極めて妥當なものであつたのです。

然るに、これ等の訓示、一度公表せらるゝや、軍部内から、俄然非難する叫びが高く揚がりました。

宇垣陸相は、十四年の四ヶ師團減少の實行者である。陸相は、今次も、軍制を改革すると共に、軍費を節約し、國家の財政經濟に寄與して、以て國民に媚びんとするものである。

これ以上の軍縮は、國防を危くするものであると云ふのです。

軍事上より見れば、再度の改編を見たにかゝらず、我陸軍は、現在の歐米新陸軍に比して、甚しく時代後れなので、當然、改善の必要がある。

又、我陸軍の兵力は、已に二回の整理を経て、師團數は十七個であるが、その兵數は、實に、日露戦前の數に減少して居る。又、陸軍費も、如何にも龐大なやうに見られてゐる

が、歐米諸國に比して、比較的多く充當すべき特殊事情例へば、我國生命線としての滿蒙問題の根本的解決があるに拘らず、其の實、案外切りつめられて居る。

故に軍事上から見れば、兵力も経費も、列國に比し、決して過大と云ふ事は出来ない。従つて經費節減は困難であつて、陸軍自ら捻出した經費は、陸軍自らの改革に、擧げて使用しなければならぬ。

宇垣陸相は、この間の消息を知らぬ譯ではあるまいと云ふのです。

宇垣陸相は、この反對に會して、これを、無視することが出来ず、間もなく、軍制調査は、國軍の改善を主眼とするもので、經費節減を眼目とするものではないと云ふ、訂正的聲明書が發表されました。

其の後、陸相は中耳炎を病んで、軍務を休んだ關係もあるでせうが、その軍制調査は、のびくになつて、完了したのは二年後の、昭和六年でした。

その経緯は兎に角、この問題は、單に反宇垣熱を煽り立てた許りぢやなく、陸軍軍備と滿蒙問題を結びつけて、國防の急を高唱する新興勢力の擡頭を結果しました。

換言すれば、參謀本部の少壯將校によつて持たれた、かの研究会の主張を、力強く支持する新興勢力が、日と共に勢を得て來る情勢を誘致したのであります。

擡頭
頭をもち上げ

七、統帥權干犯問題とは何か

又、一つの問題が起りました。普通に統帥權干犯問題と云つて居ります。

昭和五年一月廿一日から、四月廿二日までの三ヶ月に亘つて、所謂ロンドン海軍軍縮會議が開かれました。

そして、日英米三國間に、一九三六年末までの建艦休日を設定され、補助艦に關する三國の保有量が決定して、まづ、一應の成功を収めた譯なのですが――

海軍兵力量の問題で、軍令部側と、政府、及び、政府によつて支持されて居る軍縮會議全權團との間に、重大な意見の相違があつたのでした。

即ち、全權から、我國の保有すべき海軍兵力量に就いて請訓し來たつたのですが、政府は、海軍軍令部の意見を参考としたものゝ、兩者の意見が一致する事が出来なかつたので

す。それで、政府は、遂に、軍令部の意見に拘束せらるゝことなく、政府自身の判斷に従つて、海軍兵力量決定に關する意見を定め、上奏、御裁可を得て回訓したのでした。

建艦休日
一定期間を定
め軍艦を建造
することを中
止すること

解されます。

したがつて、濱口首相が、軍令部の意見に拘束されず、独自の立場から、兵力量を決定し、上奏し御裁可を得た所で、何等違法ではない譯です。

所が、法の正しい解釋は、歴史と條理によつて補つて行かねばならないから、六ヶ敷い事になつて行きます。

それで、軍の行動は、完全な自由と、策戦の秘密とを要するものであり、局外者が、これを掣肘することは、戦闘力を弱める恐れがあるものであるから、建軍以來の傳統により軍の統帥は、政府の職責以外として、専ら軍部當局者の自由活動に一任することは理由のある事であつて、伊藤公の憲法義解に、「専ら帷幄の大令に屬す。」とあるは、この事を意味するのであります。

したがつて、憲法第五十五條は、第十一條に對して適用せられないのであります。

即ち、天皇の帷幄と、天皇の政府とが、法律上、相分離して居て、等しく天皇の大権ではありませんが、統帥大権は帷幄によつて行はれ、一般國務大権は政府によつて行はれるものとせられて居ります。

こゝまでは、いづれも異存のない事ではありますが、次の第十二條が問題なのです。

陸海軍の行動は、陸海軍自身の権能で、大元帥としての天皇の大権であり、統帥大権として帷幄の下にある機關が輔弼の責に任すべきではあるが、陸海軍を作るのは、國家が作るので、國の元首としての天皇の大権である。

だから、一般國務大権として、政府が輔弼の責に任すべきで、他の容解を要しない。

したがつて、今回の政府の行爲は違法ではないと云ふのであります。併し、海軍軍令部は勿論、樞密院精査委員會に於ても、軍令部の同意なくして、政府が独自の立場から兵力量を決定上奏する事は、統帥權干犯であると云つて、政府を責めるのでした。

結局のところ、軍令部長が、海相から、今後、海軍兵力量に關する條約には、軍令部の同意がなければ調印し得ないことを承認すると云ふ覺書を取つて、軍令部の方は、收りました。

樞密院精査委員會の方も、八月十九日から九月十七日まで、約一ヶ月に亘つて、政府對委員會の正面衝突をさへ惹起するではないかと思はれる程の、未曾有な、陰慘な風雲を孕んで、論議が戦はされたものですが、何しろ輿論が政府に與し、樞府や軍部が横暴であると云ふ様な聲さへ、國民の口から洩れる始末なので、十月一日、天皇陛下の御前に開かれ

た樞府本會議に於て、該條約案を、滿場一致無條件で可決したのでした。
翌二日、該條約を御批准。

三日には、財部海相の辭職と云ふ譯で、事件は、一段落を告げました。

八、統帥權干犯問題は陸海軍將校を刺戟

統帥權干犯問題は、前述の如く一先づ落着致しました。

併し、此の問題が、陸海軍の少壯將校を刺戟した事は、非常なものでした。

前にも記しました通り、所謂五・一五事件の被告諸氏の、公判に於ける陳述を見ても、思ひ半ばに過ぎませう。

全權隨員の草刈少佐が、汽車中で割腹したのも、神經衰弱の結果、精神に異狀を來たし
てと云ふ風に發表はされて居りますが、實は大坂驛頭で、國家の危急存亡にも關はるとも
考へらるゝ屈辱的な條約を取決めて歸朝した全權を迎へる國民の熱狂振りを見て、憤懣に
堪へず、死を以て國民に警告したものと云はれて居ります。

海軍某隊の少壯士官數名が、海軍省に怒鳴り込んで、上司を面詰して、散々に手古すら

憤懣
といきどほる。

した事件が、あの直後にあつたさうです。本省では、早速、某隊長を、部下不取締だと云
つて詰責すると、左様な者の特に本省に派遣した覺えはないが、左様な者が出る様な教育
は平素やつて居る、小官の部下には、一人の腰拔なしと本省に挨拶したと云ふ風説さへあ
る位です。

陸軍軍部に於ては、勿論、建軍以來の精神に則り、傳統に従つて、憲法第十二條は、當
然、第十一條の統帥權の範圍の及ぶところで政府の專斷を、斷じて許さないと云ふ解釋を
徹底的に支持したのです。

そして、濱口内閣の陸相として、ロンドン條約に對する見解、及び態度がよろしくない。
兵力量の決定は、内閣が責任を負ふべきであると云ふ濱口首相の説に同意したのは不可解
だと云つて、又しても宇垣陸相を攻撃する者も出て來ました。

こゝに注意すべきは、少壯中堅の將校が、この問題によつて、政府、政黨、その背後に
うごめく資本閥、特權階級と云つた一連の鎖を鋭く見詰め、鋭く批判し、そしてそれと鋭
く對立する傾向を生じ來つた事です。

人々は眞劍を欠いて居る。此の國難の秋に當つて、人々は、我國建國の大精神、盡忠報
國の精神を忘れ去つて居る。世界の風潮に雷同して、徒らに和平を説き、軍備を一日も忽

走狗
いぬ

矯激
普通と違つた
行動をする事
處士
士に仕へざる

に出来ない我國の特殊な立場を忘れ切つてゐる。これは何の爲か、資本家や特權階級が悪いのだ。彼等は私慾の權化である。彼等は權力のカリカチュアだ。人々は生きんが爲めには、一切を捨て、彼等の前に叩頭せねばならぬ様に、この社會は作られてしまつて居る。萬民を殺すものは彼等だ。國家を亡ぼすものは彼等だ。彼等の眼中に、私利あつて國家なく、私慾あつて國民なく、利權の爲には手段を選ばぬ徒輩だ。そして、政黨は彼等の走狗に過ぎず、政府は彼等の代辯者に過ぎない。

建軍の本義に従つて、萬民保育の爲めに、彼等を克服せねばならぬと云ふのです。

で、彼等は、軍人と云ふ立場から離れて、一社會人として、現在の世相を觀察批判し、同志相求めて右翼矯激の徒と語り、教を乞ふて處士横議の門を叩くと云ふ傾向を生じたのでした。

かゝる雰圍氣中に於て、宇垣陸相は、又しても、人事上の過誤を犯しました。

そして、それは、宇垣陸相にとつて、最後の、又、致命的な過誤であつたのでした。

九、清軍運動の擡頭

昭和五年三月、參謀總長鈴木大將が、任滿ちて豫備役となり、引退する事となつた時、後任に就いて問題が起つたのです。

當時、教育總監であつた武藤大將は、大將としては最古參であり、人間としては、寡黙謹嚴の士であり、その人格に於て、その才幹に於て、部内の輿望を一身に集めて居た人でありました。

舉軍、當然、この人が參謀總長の椅子に就くものと、豫期しない者はなかつたのです。ところが、宇垣陸相は、鈴木大將と相談して、金谷大將を總長に据ゑようと策動したのでした。

それで、總長後任決定の爲め、開かれた三長官會議席上で、宇垣陸相と、鈴木參謀總長は、金谷大將を推したのですが、全軍唯一の適任者武藤大將自身は、三長官の一人として列席して居る以上、陸相の提案は、無造作に容れられて、金谷大將が、參謀總長と決定したのでした。

俄然、宇垣大將は、非難攻撃的となりました。

例の參謀本部少壯將校を中心とした研究會は勿論、遠く大正六七年の昔から、清軍運動の中心となつた永田少將や、岡村少將等が、その急先鋒となり、最古參の大將、全軍の輿

望を負ふ武藤大將を差しおいて、順位はるかに下である金谷大將を擧用すると云ふ理はない。陸相は自己の勢威を強固ならしめんがため、軍の人事公正を紊すものだ、と非難する聲が次第に高まつて参りました。

この非難は決定的なものでした。そして、これを機縁として、人事公正、清軍の必要は一つのグループ、一つの會の主張ではなしに、全陸軍の要求となつて参りました。

十、遂に荒木時代

惟へば、嘗て、長閑華かであつた時代、権力の重壓下に喘ぐ少壯中堅將校が、たとひ人事に不平あり、不満ありとするも、濫りに口にする事は出来なかつたものです。上長の爲す所は、斷じて下部の批判を許さず、もし犯す者あれば、彈壓又彈壓、軍の圈外に放つて顧みなかつたものです。

ですから、清軍運動と云ひ、讀書會と云ひ、下位にして人事の公正を期し、少壯にして國家の大計を策する將校がなかつた譯ではないのですが、表面化して、一般的な運動となり得なかつたものです。外見から見、一方的な立場から眺める時、軍の統制が、恐ろしく

棟梁の器
頭株の人物
餘喘
わづかばかり
のあへき

整然として、見る人、眺める人の目に寫つた事でせう。

所が、山縣、寺内、田中、山梨と長閑の巨頭が變るにつれ棟梁の器、次第に小さく、閥族の勢ひ亦正比例して、次第に縮まつて行きました。

そして、宇垣陸相が、時代の變移に目敏くも、斧鉞を一度揮へば、長閑の權威地を拂ひ二三の僅に餘喘を保つに過ぎぬ情勢となりました。

この、権力の不自然な中心が破滅倒壊した其の事が、少壯將校の正義感を刺戟して、一の不義、一の不正をも許さず、批判し盡して止まない風潮を助成して参りました。

而して、宇垣陸相其の人の人事、亦た、誤解を招き易く、其の手腕、餘りに政事家的であつたが爲めに、常に、問題を少壯將校の批判の前に提供したのでした。

大正十四年の軍縮。

昭和四年の軍整。

昭和五年の統帥權問題。

中堅將校は、これ等の問題を批判すると共に、宇垣陸相を非難するばかりではなく、その問題の奥にひそむものを把握し、認識するに躊躇しませんでした。

國民は無自覺です。

躊躇
ためらふ

政黨は腐敗してゐます。
内政は不眞面目です。

外交は軟弱です。

さらば建軍の大義に従つて、保民の實を擧ぐべく何が必要でせうか。

世界風潮の如何にかゝらざる我國の特殊事情に適應した軍備の必要です。

滿蒙問題の根本的解決です。

軍の近代化、科學化の必要です。

精神的な軍の建直しです。

そして、その實行への第一歩として、軍の人事の公正を必要としたのでした。

その人事公正を、宇垣陸相が、昭和五年、最後のに過つた時に、彼等中堅將校を中心に人事公正を要求する叫びは、漸く、表面化し、大勢、遂に、軍の上層をも動かすに至つたのです。

これ等、少壯將校の意志の、具體化した一例は、荒木中將の中央部復歸でありました。

教育總監武藤大將は、他の意見に拘束されずに、嘗て、上司に迎合せず、常に、所信を主張して曲げなかつたために、邊土熊本に左遷された荒木中將を、自分の部下として、敬

育總監部本部長の椅子に迎へたのでした。

昭和六年、荒木將軍は東上赴任します。各驛では「我等の荒木將軍を迎へよ」と云ふ檄が飛んで、各隊の將校が、その列車を迎へ期待と激勵の辭を呈します。かくして荒木將軍は、全國的な、少壯將校の支持と期待の嵐の中に入京したのでした。

實に軍部は彼を要求したのであります。

軍人的な、餘りに軍人的な荒木將軍は、多事ならんとする軍部に迎へられて、巨星の如く輝きませう。

同じ六年、宇垣將軍は西下します。四十年來の劍を捨て、朝鮮總督として赴任するのであります。彼も亦偉材です。多くの問題を惹起しながらも、それを解決する文の、才能手腕の持主です。

だが、未だ日本は彼を必要としないのです。

政事家的な、餘りに政事家的な宇垣將軍は、多事ならんとする政界を外に、惑星の如く煌めいて居ります。

やがて、若槻内閣は倒れました。

大養内閣成立するや、南陸相は、阿部大將を推し、軍の上層も亦た、その適任を信じた

のでありますが、中央部に於ける十六期の人々、舊研究会の人々を中心、全國の少壯將校は、一齊に荒木將軍を推して、三長官に迫つたので、南陸相は、この大勢を押切る事は軍の統制を破る事であると云ふ見地から、屈して、荒木將軍を陸相に推しました。

遂に荒木陸相！

遂に荒木時代！

かくして、新興軍部が、出現したのであります。

十一、舊軍部と新興軍部

とは何處が違ふか

かくして、長閑の重壓下に、權力を中心として構成された軍部でもなければ、郷土閥、個人閥の操り人形とも見れば見られた軍部でもない、全然内容を異にした軍部が出現しました。

それは、下位下級の少壯將校の自覺と、その反撥から、軍全體の覺醒を促し、上、將官から、下、學校生徒に至るまでを包含する幾つかの思想を中心とする潮流が出来、その中心によつて構成された軍部なのです。

この軍部が、新興勢力を代表し、全軍的支持を獲得し、建軍の精神を發揮し、國家機構の全體に向つて、有機的に、強硬に、活潑に働きかけ始めたのでした。しかも、その思想的中心は、必ずしも將官階級ではないと云はれて居ります。

更に、此の新興軍部は、舊來の軍部の如く偏狹な立場から、職業的意識から軍備至上主義を強調するのではなく、廣く國家、社會の事相を研究した結果としての、一日も忽にすべからざる軍備を畫策し、主張するのでした。

國家、社會の諸事相を研究する事は、純粹な軍務ではありませんが、已に述べた通り、軍部と云へば、政治的方面に接觸する國軍の一部を指す以上、接觸する外部を反映するのは不思議な事ではありません。

例へば、工業動員の研究を命ぜられた軍人が、我が軍需工業制度と、ソヴエートの軍需工業制度とを比較研究する場合、我重工業に對して深刻な批判を下した所で、それは當然な事であり、その改善を要求した所で、考慮すべきで、拒絶すべき筋ではありません。

世界の情勢に不斷の關心を持つ彼等が、彼等の立場から、我國外交當局の方針を、餘りに屈辱的である、餘りに追隨的であると非難したところで、それが正しい認識であつたとしたならば、外交當局も、其の言に耳を傾けざるを得ないでせう。

重工業
輕工業に對す
る言葉で鐵鋼
製船車輻機
等の器具製
造等ないふ

農村經濟の破綻に關しても、農村出身者が戰鬥員の大部分を占めてゐる陸軍として、關心をそこに集中するのも當然の事とせう。

かく、彼等は諸般の研究、即ち、國力に立脚する廣義の國防、財政、産業、國民の生活状態、國際政局の大勢等を充分に考慮に入れて、然る後、軍備の急を呼んで、その充實を要求するのです。

故に、職業的野心の達成や、軍國主義的な見解や、軍備第一主義や、陸軍至上主義の立場からする要求でないに、國民はその説に耳を傾け、その力に信頼するようになるのでした。

だから、舊軍部こそ妖怪であれ、新興軍部は、一脈の妖氣を漂はしながらも、國民大衆の期待となり、希望となり、現在の國策遂行上の中樞神經となつて、活躍しつゝある次第なのです。

十二、新興軍部は何を考へてゐるか

さて、宿望遂に成つて「我等の荒木將軍」を、軍部の首腦となし得た若き陸軍は、世界

熾烈
さかん

大戰後の時局に對して日本の立場を築かんとする國策樹立の第一歩として、陸軍の再建、軍備の充實を熾烈に要求し、國策の中心たる滿洲問題の根本的解決を希求する聲を、次第に高めて參りました。

抑も我國の國是は、開國進取、以て、國力の充實と國運の進展とを計り、且つ東洋の平和を確保して、世界人類の福祉に貢獻すると云ふ事でありませう。

したがつて、我國軍の目的は、國土を防衛し、國民の生存福利を保障し、我國の國是を貫徹するにあるのです。

而して、國力の充實、國運の進展は、我國の如き状態にあつては、是非とも、大陸の資源に俟たねばならぬ事は明白な事實です。

國內消費量の約六分の一にも等しき食料を外國の生産物に仰がねばならぬと云ふ一點から見ても、大陸資源の利用は、刻下の緊急事であるのであります。

故に一朝事ある時、我軍は、單に我が領土の直接防衛に任ずる許りではなく、國民の生存福利を保障せんが爲には、是非、大陸疆域を制し、以て、資源の利用を確保して、一面戦争の持久に備へ、一面、所要の方面に、適時兵力を集中し、即戰即決の舉に出でねばならぬのであります。

その爲には、質、量ともに優秀な兵力を必要とするのであります。

顧つて、世局の變轉を見ますに、一種の反動時代とも申しませうか、惰性的に、或は平和を説き理想を説き、或は國際協調を語るとは云ふものゝ、その實際に於ては、帝國主義的な傾向をとり、各國比々として然らざるなき時世であります。

特に我國は特殊な位置にあつて、支那政情の不安と云ひ、ソヴェート聯邦の東方政策と云ひ、米國の極東方策と云ひ、太平洋問題と云ひ、我國は、國家の興亡を賭しても、解決せねばならぬ問題渦中にあるのであります。

斷じて、財政技術に拘泥し、屈辱外交に引きづられて、軍縮を云々すべき秋ではないのであります。

況んや、滿蒙問題は、我國の存立に、至大な影響を有する事は、今更甚に喋々を俟たぬ事でありませう。接壤の關係に於てのみならず我國の人口増加、資源涸渴、市場減少等の事實から見ても當然の歸結として、重大、密接な影響を有して居るのであります。まして、かの日清、日露の兩役が何の爲に戦はれたか。かの多大の犠牲と、幾多の流血は何の爲に失はれたかを考へる時、自から釋然たらざるを得ない譯であります。

かの英米が、支那に市場獲得の爲、活躍するが如きに比し、滿蒙に對する我國の努力は

接壤
土地を接して
あること

其の眞劍味に於て多大の懸隔があるのです。實に我國にとつては、絶對の死活問題であり英に於ては、よりよき生存を求むる比較的な問題に過ぎないのですから。

故に、若し、我國の極東大陸發展に對して妨害を加へ、或は條約既得の權益を無視して自己の勢力を扶植せんとする如きものがあつたならば、斷乎として排撃せねばならぬのであります。

この國家自衛權の發動は、軍備の充實に俟つ以外に方策がないと云ふのが、この新興軍部の、陸軍再建、軍備擴充を高唱し、主張する理由でした。

然るにです、民衆の大部分は、實現の可能な世界平和を夢見て、軍縮を謳歌し、資本家並に特權階級は、財政難、經濟國難を強調して、自己の利害をのみ慮るに急に於て、國家百年の大計を顧みず、政黨は腐敗し、政府は無能。

この國情を見るにつけ、軍部は慷慨悲憤。

萬民救はざるべからず。資本家一撃せざるべからず、政黨清掃すべし、政府鞭撻すべしこれ我國軍の責務である。我國の軍隊は、天皇の軍隊であり、天皇の大御心は、萬民の保育にあらせらるゝが故に、天皇の軍隊も亦、億兆の保育を其の建軍の本義とする。故に國の危急に際して、億兆を救ふは、特に救ふ者なき現在に於て、軍の責務である。と云ふの

変除
とりのぞく

です。

そこで、軍部は、独自の立場から研究して國策を樹立し、該國策を遂行し得る政府を選んで、これを實行せしめ、萬一、該國策遂行の途上に横はる者あらば、斷行として変除するの決意を以て、この國難に當らねばならないと云ふのが、當時の軍部の、そして中堅將校の叫びであり、同時に全軍の空氣でもあつたのです。

そこで、軍独自の立場から樹てられた國策を遂行せしめ得る政府は、資本閥の走狗、特權階級の代辯者たる政黨内閣では斷じてないと云ふ彼等の考へは、政黨者流の神經を鋭く刺戟して、政黨對軍部の抗争は日に目立つて参りました。

かゝる時に當つて、かの滿洲事變は勃發したのであります。

十二、滿洲事變の勃發をさつ かけに軍部は立ち上る

昭和六年九月十八日午後十時二十五分、我が滿鐵線が、奉天北部の柳條溝に於て、北大營の支那正規兵の爲に爆破されました。

奉天駐在獨立守備隊の大隊長島本正一中佐は、この報告に接して、蹶起一番、即時行動

を起して、僅に六百の兵を以て一萬の支那兵を撃破し、十九日午前零時半、早くも北大營を、午前五時には奉天城を完全に占據したのでした。

果然、この神速果敢なる島本中佐の行動は、滿洲事變の因となり、皇軍の活動となり、滿洲國の新興となり、我國の聯盟脱退となり、我國未曾有の非常時現出とまで展開したのであります。元來、かうした事件は、國際間の大問題となるべき性質のものであり、種々派生的な問題を惹起するものですから、中々尋常には決斷斷行し得る事ではないのです。

これは一つには、膽斗の如き島本中佐にして始めてなし得る事なのでせうが——事實、島本中佐は、大尉時代、シベリア派遣軍の參謀として、軍がザバイカル引揚に際し、最後まで踏み留つて情報勤務に服し、熱心過ぎて大井軍司令官に叱られたと云ふ愉快な挿話や、派遣軍撤退の時、赤軍が協定を破つて、ウゴリナヤから、オケヤンスカヤまで進出した時、時乘中佐と共に軍使となつて敵陣に赴き、口と腹とで、遂に之を撃退したと云ふ風な挿話の持主ですが——一面、その島本中佐が、『敵陣を浴びつゝ、猛進する兵士をどうして止めようかと苦心した』程、軍隊が、事件直前に、一體に非常に緊張して居た事も事實です。これは、後の上海事變に於ても同様であつて、青年將校が第一線に立つて奮闘の結果、今までの戦史に無かつた程の、將校戦死のパーセンテージが多かつた理由を、荒木陸相が

膽斗の如き
大膽なる形容

説明して、『要するに、對内的にも、對外的にも、ジツとして居つてはいかん。危急存亡の時機にあるといふことで、』非常に士氣が振つて居た爲だと云つた事と考へ合せて、國防の第一線に立つ彼等、即ち陸軍が、軍部や、少壯將校を中心として、事前、已に事變を見透して、下一兵卒から、上元帥に至るまで、異常な決意を持つて居たと云ふ事の證據でありませう。

さて、この事變を一轉機として、國家は、非常時に突入しました。そして、續いて起る上海事變、聯盟問題、五・一五事件など、云ふ凄しい怒濤と戦つて行かねばならぬ事になりました。

同時に、軍部は、今迄、研鑽に研鑽を重ね準備を重ねて、思想的に蓄積し來つたものを、いよいよ實行に移すべく、立ち上つたのです。

十四、新興軍部の陣營

先づ人事です。蠟燭の燃え残りの様な長閑も一息に吹き消されてしまひました。宇垣閣とか、石川閣とか云ふ、所謂個人閣や郷土閣も完全に清算されてしまひました。もつとも

武藤閣が全盛だとか、佐賀閣が勢力を得たとか、土佐閣が擡頭したとか云ふ様な事を聞きますが、これは、在來の様な權力を中心とした閣を意味せず、單に、偶然、郷土を同じうして俊秀を出したとか、意見を同じうし、思想を等しくした一群が、圖らずも、そう云ふ風な概念で片付けられたと云ふに止まるのであります。

で、その人事異動の顯著な現れは、金谷參謀長の没落です。

九月十九日早朝、參謀本部の支關で、新聞記者に圍まれて、『一切俺にまかして置け』と傲語したのも束の間、朝夕酒杯を離し得ざる醇漢何事をかなし得る、非常時國家の大事託するに足らずと云ふ譯で、中堅將校の不信任を買ひ、遂にその位置を失つたのでした。

閑院宮、親しく、非常時國家の參謀本部總長の椅子に就き給ひ、次長に、時の臺灣軍司令官眞崎甚三郎中將が坐つたのです。

かくして、武藤教育總監を大御所に、眞崎參謀次長、荒木陸相と三長官舉軍支持の軍部首腦部が定まつたのです。今度は部外に對する活動です。

滿洲事變によつて、完全に軍部の見透しの正しかつた事が證明されたのですから、軍部の意氣は軒昂たるものです。

従來、多少なりとも、政黨其他と妥協して來た一切は排除せられて、軍本然の姿に歸つ

軒昂
意氣のあがる

て、軍部自身が、研究し、劃策し、蓄積し來つた國策遂行に全力を擧げて活躍しはじめました。

そこで、當然、以前からの経緯もあり、政黨と鋭い對立の情勢を誘致したのでした。元來、荒木陸相は、日本主義、皇室中心主義を以て終始する人です。その主義から、その信念から、日本再建を説いて止まぬ人でした。

大川周明や、安岡正篤と共に、この日本主義を論議し、研究しあつた事もあるのです。

又、國本社を、平沼騏一郎と共に、創設して世界大戰後の思想的動搖を、日本主義を以て打開せんと試みた事もあります。

このやうな事からしても、陸相の言動に、右傾的な、ファツシスト的な色彩を、國民は感じて居るのでした。

それに加へて、參謀本部を中心に、佐官級の會合や、尉官級の會合が出來て、軍部の全面的な、國策論です、日本再建論です、資本閥への手強い非難です。政黨政府への鋭い批判です。

政黨其他の既成政治勢力は、この新しい軍部の活動に對して、出來る丈抗争し、出來る

麾下
直屬の部下

文壓迫を加へたのですが、人的に從來と異つた軍部は、質的にも建直つて、外部の壓迫に厭へられては居なかつたのです。反つて、外部の壓力に對して鋭く對應するのでした。で、荒木陸相麾下の士として、最も急進的な分子として知られた人々は、

- 大佐 重藤千秋
- 中佐 橋本欣五郎
- 中佐 根本博
- 中佐 田口康也
- 少佐 藤塚止才夫
- 少佐 影佐禎昭
- 少佐 馬奈木敬信
- 少佐 和知鷹二

の面々でした。

この頃の事です、軍部は、軍部政府の樹立を企て、居るのだ、軍部は、軍部獨裁の政治を目論むで居るのだ、軍部は、政黨を否認して居ると云ふ風な、流言蜚語が盛に行はれたのは……。

十五、五・一五事件と軍部

對外的には、對支、對聯盟の問題が紛糾し對内的には、軍部と政黨との對立がいよいよ甚だしからんとする秋に當つて、又々、一大事變が勃發したのでした。

五・一五事件です。

國粹的な、右傾的な諸團體の人々が、陸海軍軍人と提携して、白色テロを行ひ、犬養毅相は、其の犠牲となつて、老軀を官邸に横へました。

この事件が、國民を刺戟し、戦慄させた事は非常なものでした。

既成政黨に信頼を失ひ、國家非常時に際して、新興軍部の言動に、一縷の望を繋ぎ得た國民は、この擧に愕然として、軍部の誠意を疑はずには居られませんでした。

獨裁への第一歩！

フアツシヨへの第一轉！

聰明なる軍部は、國民の信頼を裏切ることゝ極度に恐れられました。直に、軍の統制に全力を傾けました。軍閥打倒以來、權力の重壓から逃れた少壯將校は、言論の自由に於て、或

白色テロ
赤色テロに對
して用ゐられ
る反革命的防
禦手段の積極
的なもの

は、その炬を越えた結果、この不祥事を惹起したものではなかつたでせうか。荒木陸相は此の點に留意しつゝ、全軍の軍紀を嚴ならしむべく努力しました。

國軍は、大元帥陛下たる天皇の指揮命令下に置かれて居るのである。大元帥以外に、國軍に對して命令權を有する者は一人もなく、軍自身も、自働的に行動することは絶対に許されません。だから、軍人の小集團的行動は、建軍の本義から考へて、軍紀崩壞の因であり、軍紀の崩壞は、軍の崩壞を意味する事なのです。

で、犯人を嚴罰に處すべく處置すると共に、非軍藉者を司法部に引渡しました。

急進派の人が、敬遠され、左遷されました。

武藤宗の本山、武藤大將が、教育總監の職を辭して、その責のある所を明にしました。その後任として選ばれたのは、今西郷として有名な、朝鮮軍司令官林銑十郎大將其の人でありました。

又、事件の直後、五月二十日、陸軍參謀長會議に於て、荒木陸相は、有名な訓示をした事は、既に述べた通りであります。

たゞ、海相及次官が、引責職を辭したに拘らず、陸相が、依然として其の地位に在る事に對して、多少の非難はあつたのですが、それは、全軍の輿望を負ふた荒木に依つてのみ

完成し得る諸種の事業が、その辭任によつて中斷される事を恐れて、忍び難きを忍んで、全軍の爲めに留任したのでした。

かくして、信を國民に問ふ一方、軍部は、政黨に對して、政府に對して、一步もゆづらず、その主張を曲げませんでした。

陸軍の士官候補生のやつた手段は悪い。悪いから嚴罰に處する。併し、候補生のやつた事は、私憤ぢやない。公憤だ。至純な青年をして、この公憤を起させた責任はどうするのだ。腐敗したお前達、無能なお前達の責任ぢやないか。放つて置いたら、第二第三の不祥事が起るかも知れないぞと、積極的に、政府、政黨の責任を問ふのでした。

政黨も、政府も、官僚も、力なく其の前に屈しました。所謂憲政の常道は中斷し、政黨内閣は暫く影をひそめました。

議會に絶對多數を擁する政友會が、後繼内閣を夢見て、閣員まで内定したのが其儘となり、遂に協力内閣、齋藤内閣が成立したのでありました。

そして、軍部との諒解の下に、内田外相が就任し、軍部指導の下に、自主的外交を宣言する事になつたのです。

干與
關係する

で、これ等の経緯について、陸軍の行動は政治干與であると非難する者があれば、

陸軍大臣は、國務大臣である。

陸軍次官は、高等官一等の文官で、大臣を補佐する役目である。それが政治に干與することが何故悪い。局長が求められて意見を具申することは當然ぢやないか。

軍人だから、國家が潰れるやうな瀬戸際になつても、そして誰もそれを救ふ者がなくて、指を叩へて黙つて居なくてはならないのかと、強硬に應酬しながら、軍部は、軍部の信するまゝに、政局を指導し、政府を匡救して、この國難に善處すべく、活動努力したのでした。

十六、軍を統制しつゝ、押進む 軍部

五・一五事件直後、軍部のとつた應急對策は前述の通りでした。そしてその清軍運動が一段落ついた時、軍の統制作用が、更に、徐々として、組織的に行はれて行くのでした。

先づ、武藤大將は、關東軍司令官となり、特命全權大使に任命せられて、滿洲國に赴任しました。

軍部切つての政治家であり、且つ、有數な滿洲通なる、陸軍省次官小磯國昭中將は、關

東軍參謀長となり、岡村寧次少將は、關東軍參謀副長となつて、その事務的才幹を振ふ事となりました。前關東軍參謀長として、本庄將軍を補佐した橋本虎之助は、關東軍憲兵司令官となり、前關東軍高級參謀板垣征四郎は、執政顧問となりました。

一方、眞崎參謀次長は、軍事參議官に兼補して、本庄將軍と共に、軍事參議院に新空氣を流入し、騎兵監柳川中將を陸軍省次官として、荒木、山岡と共に陸軍省を統御して行くことになりました。この首腦部の異動につれて、急進少壯將校は、適當に待機の位置に就けられたのであります。

かくの如く、本庄將軍が石原、板垣等と創業時代を劃して重任を去り、武藤將軍が、小磯、橋本、岡村の陣容を以て、滿洲國に臨んだと云ふ事は、繰り返して云ふ如く、少壯氣銳の中堅將校を、暫く待機せしめる爲ではあります。同時に、軍部が、その對滿政策にしつかりと腰を入れてかゝつた事を意味するのです。

武藤大將が、全權大使に任ぜられた事は、滿洲の政治支配が、軍部のヘゲモニーの下に完全に、在來の、滿鐵總裁、總領事、關東廳長官、關東軍司令官の四頭政治を打つて一丸とした事を意味するのであります。願ふに、現在の軍部を構成する諸將が、未だ、軍閥の重壓下に喘ぎつゝあつた頃から

ヘゲモニー
覇權

研究した滿洲です。

筆に口に、機會ある毎に、その根本的解決を叫んで、國民に呼びかけた滿洲です。今や彼等は偉大なる歴史的使命を果したのです。父祖先輩の流血を意義あらしめて、一劍よく滿蒙を、日本の生命線としたのでした。『彼は戦つた。我が關東軍の將士は、旭日旗を振りかざして、本國の三倍大の土地を東奔西走し、僅か一萬餘人の孤軍を以て二十萬に餘る支那軍と、約半歳の永きに亘つて戦つた。』

或者は、嫩江河畔齊々哈爾の荒野に屍を曝した。或者は、錦西の邊地に骨を埋めた。又、或者は、寒風肌を割くの深夜、鐵路の警備に寢食を忘れた。彼等が南討北伐の戦歴は、人類史上稀に見る偉觀であり、永く我が青史を飾るものがある。と、參謀本部の中佐は、僚友のために、頌徳表を草したさうです。

この中佐の感激は、直に、全軍の感激です。この大業を果した國軍が、軍部が、この戦果を守つて、今後邦家百年の國策のキーストとなさんとする以上、軍の綱規を紊り、民の信頼を裏切る恐れなしとせざる壯少氣銳の急進分子を待機せしめ、大局を掴む巨人武藤、智略縱横の政治家小磯、快力亂麻を斷つ底の實務家岡村、と云ふ絶好のトリオを送つて。先づ、滿洲を軍部はしつかりと握つた譯な

邊地
片田舎

頌徳表
人の徳をほめる文

トリオ
三位一體

のです。

十七、満洲國を握つたまゝ、 押進む軍部

軍部は、第幾回目かの清軍を終りました。

國民は「荒木は決して無茶をする男ではない。信頼し得る男だ。」と、現在の一關係が語つた言葉を、段々と信じて來ました。

「軍部は決して政黨を否定した事も、政黨政治を否定した事もない。たゞ、それが腐敗して國家を蝕毒する場合、見逃し得ないのである」と云ふ軍部の言葉に安心しました。

そして、満洲事變の成果が、日本の生命線として、どれ程價値あるものであるかと云ふ事を正しく認識し出しました。更に、軍部が満洲をしてかくあらしめた努力に對して、心からの感謝を捧げました。

かくして輿論は軍部の方にあつて、既成政黨は次第に見捨てられました。

リード
指導

軍部は、益々強硬に、政局を、政府を、リードして行きます。斷然、聯盟を説退しました。

蝕毒
害毒

掃 匪
匪賊をうち拂
ふこと、匪賊
は悪者

斷然、満洲國の爲に熱河掃匪を敢行しました。

斷然、自主的の外交方針を内外に宣言しました。

張學良の在る所は我々の兵の動く所、満洲問題の解決場所と、軍は遂に長城の線を越えました。

これ等の斷乎たる處置は、豫期した様な紛糾を齎らさず、反つて事件を有利に解決するかに見えます。

國民の信頼は、軍部に對して日に日につつて行きます。

武藤さんが死にました。

菱刈大將が後任と決定しました。

定期異同が行はれました。

多少の人事が、變動しました。

しかし、軍部の方針に何の變化もありません。しつかりと、満洲を握つたまゝ。

十八、政局をリードしつゝ、 押進む軍部

時局は、小康を得て居ります。

國民は、何かなしホツとして居ります。

だが、軍部は、更に緊縮一番すべき秋として、國民に警告を怠りません。

一九三五―三六年にやつて来る東洋の危期に備へよと云ふのです。

で、恰度、滿洲事變直前の様に、軍部は、独自の立場から、現在内外の政局、並に將來の國際關係等につき確乎不動の國策を樹立し、内閣をして、これを實行させようと云ふ説が軍部内に高まり、首脳部は、如何なる方策を如何なる方法によつて實行すべきかを具體的に鋭意研究を重ね、大體の成案を得たので、荒木陸相は、右の案を持つて昭和八年九月九日午前九時半、藏相官邸に高橋藏相と會見し、腹藏なき意見を吐露し、併せて藏相の所懐を求め、午後一時まで三時間半に亘る會見を終へました。其際荒木陸相の述べた内外重要問題に關する成案は、次の様なものであると云はれて居ります。

○滿洲問題

滿洲國の現状に付、詳細な説明を試みた後現在の日本としては、何を措いても、滿洲國の健全なる發展を企圖する事が、最も重要な國策であつて、他の諸政策は、これを中心として按配せらるべきである。然して、過去二年に亘る滿洲の實情は、非常なる速度を以て

改造せられ、産業の開發も略、所期の計畫通りに行つて居る、治安維持も、事變前と變らない程度になり、第六師團の歸還も可能となつた次第である。この期を逸せず、力を産業開發に致せば、その成果期して待つべきものがある。

○支那問題

宋子文の歸朝後、蘆山に於て南京政府の首脳部は内外諸般の問題に關し、研究討論して居るが、支那側としては今俄に對日態度を變更することは國內情勢が許すまい。然し日本としては、あくまでも根本方策としては日支兩國の善隣關係こそ望ましい事であるが、さりとて、不用意な行動は、却て支那側に乗ぜられる事になるから、十分なる戒心を以てその動向を注視してゐなければならぬ。その時々起る諸問題については、それ／＼關係方面に於て遺憾なく協調して對處すべきである。

○對外國關係

聯盟脫退通告後、世界の狀勢は、日本にとり必ずしも良好であるとは云へぬ。殊に支那が、以夷制夷的外交を繼續する以上、この對外國關係が、急速に改善せられるやうな事はなからうと信ぜられる。

然るに、一九三五―三六年は眼前に迫つて居る。

實質的聯盟脫退期。

第二次ウオシントン會議開催期。

しかして、わが海軍力が、英米に對して低下する時期。

こゝに東洋の危期が孕まれて居り、日本としては未曾有の國難に直面しなければならぬ。國際狀勢が改善の見込み薄い今日、どうしても、東洋の平和を確保して行くには國防力の擴充が必要である。

海軍が第二次補充計畫を急ぐのは當然のことであり、又陸軍としても、對支、對露關係に顧みても強力なる軍備を準備してゐることが、現在としてはもつとも有効なる平和維持策である。

區々たる財政技術の問題などに拘泥してゐて、この最大の國難を切り抜けるに十分ならざるやうな事になつては取返しのつかぬ事と云はねばならぬ。

對外關係においては、この一九三五—三六年を目標として國民一致せねばならぬ。

○教育問題

明治以後の日本の教育制度は、非常な發展をした事は事實であるけれども、今や、其の教育は、動もすれば、教育の爲めの教育に墮して、眞に國家國民のために必要な教育が

忘れられ勝になつてゐるのではないかと思はれる。共產黨員中には、純然たる無産無識階級から出たものもあるが、高等教育を受けた者の中から多數輩出して居る事は、我が教育のどこかに重大なる缺陷があるのではないかと思はれる。どうしても、萬國に比類なき我が國體の精華を徹底せしめ、日本人たるの教育に立ち歸らねばならぬ。

○思想問題

教育の缺陷が、思想上に悪影響を及ぼしてゐることは前述の通りであるけれど、更に、又、我が政治經濟組織の中にも、この思想悪化を助長したものが頗る多いと思はれる。この方面は、政治家の力を以て、或る程度まで矯正出来ることであるから、萬難を排して、諸政更新を計らねばならぬ。

要するに、『日本としては、滿洲國を速かに完全に發達せしめる一方、眼前に迫れる國難打開のため、政治家も、教育家も、將た民間の有識者も、一致團結して事に當らねばならぬ。』

それには、まづ、政府が率先して、確固たる政策を立て、これを力強く實行しなければならぬと思ふ。』と云ふのであります。

十九、實行を強調しつゝ、 押進む軍部

滔々三時間半に亘つて説き來り説き去つた陸相の提案なるものは、前述の如しと新聞は報じて居ります。一讀して事理甚だ明白、一言の奇なく、一句の偏なく、軍部は決して妖怪でない事を證據だてゝ居ります。

たゞ、この國難に際會し、この危局に直面しては、日本人で有る限り盡くかく感じ、かく考へて居る事せう。切言すれば、此の程度の提案は、陸軍の俊秀を煩はすまでもなく、彼等の所謂腐敗せる政黨と雖、樹立し宣言し得るに相違ありません。

果然、荒木陸相は、この會見直後、新聞記者に語つた言葉のうちに「如何に立派な政策を樹てゝも實行せぬでは何の役にも立たぬ。もう調査や、研究に没頭してゐる秋ではあるまいと思ふ。實行だ。實行あるのみである」と語つて居ります。

嘗て、田中内閣時代、滿蒙政策確立の爲開かれた東方會議席上、三つの草案が提出されその何れを探るべきやが論議された時、終始黙々たる武藤將軍に向つて、或人がその可否を問うたのです。「第一案は如何です。」「結構ですな。」「然し第二案の方も。」「いやそれ

も結構ですな。」「第三案も相當立派なものです。」「なる程、それもいゝですな」結局武藤大將は三案とも結構だと云ふのです。噫然として居る一同に向つて、「徹底的に實行さへすれば、どの案でも結構です。」と云つたと云ふ事です。

政黨や政府が國民から見棄てられた最大の原因は、その政綱なり政策なりを、十に一つも實行しなかつた事でありませぬ。

その提案は、よし平凡であるにしても、實行だ。實行あるのみであると斷乎として云ひ放つた所に、武藤宗の衣鉢を繼いで全陸軍の輿望を擔ふ荒木陸相の面目が躍如として居るではありませぬか。

陸相は更に云ふのであります。「陸軍の成案が、斯く表向きになつた以上、自分としては是非政府に誠意を以て、諸政策を實行してもらひたいと思ふ。」

正に、千鈞の重みをもつた言葉であります。軍部は、今や、その面目にかけても、政府をして、未曾有の困難に處する當面の國策として、軍備の擴充を計らせようと致して居ります。

世局は多岐、世相は多端、かくなすべし、かくなさざるべからずと知つた所で、その手段、その方法、素より二三に止まらず、國家の利害得失は、實に計るに由なき微妙なもの

千鈞の重み
大きな重み

であります。

殊に、經濟困難の現在に於て、如何にして軍部の面目を立て得るでありませうか。軍部の面目立つて、果して、未曾有の困難を突破し得るでありませうか。陸相、成案を提げて、先づ藏相の門を叩いた所に、無限の意味があるではありませんか。とまれ、軍人の政治に干渉するは、建軍の本旨に悖るや否やは如く措き、軍人をして、安んじて軍務に専念せしむるに足る大政治家の出現を望むは、無理な事ではせうか。

刊	月刊 國民講座		毎月一回一日發行	一ヶ年前金送付の方に限り
	「景氣は何うなるか？」		定價十錢(送料二錢)	一ヶ年分一圓に割引(送料共)
	送料	定價	二十錢	二十錢
既	「フアツシヨつて何んだ？」		送料	定價
刊	「ナチスを語る」		送料	定價
	送料	定價	二十錢	二十錢

發行所

東京市神田區小川町二丁目二

國民社

振替東京四五三二番
電話神田二六四七番

終

定價十錢

(含稅二錢)

印刷部

東京市神田區小川町一

國民社印刷部

發賣所

東京市神田區小川町二丁目二

國民

社

電話神田二